

この心の問題で大館には後ろ向きにものを考える方も結構いらっしやるんだということを提言したいと思います。テレトピア構想とかテクノポリスだとか、ニューメディア、それに一村一品運動や地域興しなどを新聞で読みますと、大館は非常に残り残されているんじゃないかと思われているのは私だけじゃないかと思うんです。最近大館に転動してこられたマスコミ関係の方が「大館っておもしろいところだ。十人の人に会えば、みんな口をそろえて景気興しのためになんとかしなけりやいな」というんです。ところが「じゃ何をやるんですか」というと、十人も「どうしよう」という答えが出てくるというんです。これがいま現実の大館なわけです。何か無意識のうちに私たちは劣等感を持っているんじゃないかと思えます。大館に転動してこられた方に「この町はどうですか」と尋ねますと、必ず出てくる言葉が「とつつきにくい。とつけんんだ。和がない」。これも我々なんです。今日ここへ来る前に大正九年十一月二十五日発行の「大館案内」という本を見ましたら「天時地利、兼ね合わせている大館が、大いに振うべくして振わざるの理由は多々あるが、なかでも人の和なきが先ずその第一」と、大正九年にこんなことが書かれていますね。こうなれば大館の人の和がないということは伝統的というか、筋金入りなわけです。今後心の問題で課題となるのは何かといたら、地域を活性化していく中で長所を伸ばしていく

ことに心掛けていかなければいけないと思います。二十世紀までには、この大館、この地方の文化、社会、そして自分の生き方というもの、ますます洗練させていかなければいけません。  
**清水**・どうもありがとうございます。次の提言を松山紀光さん



松山さん

**松山**・私は、もう少しやる気、協調性をもっと大館の人には必要なんではないかと思えます。また私たちは、なんでも行政に頼む前に私たちが何をやらなければならぬのか、自分たちがこういうことをやったらどうなるんだらうかということを考える必要があると考えます。特に子供のいまの余暇活動についてですが、塾やクラブ活動のない日に一週間に一日でもいいから、町内で何かをやるといふ考えも必要ではないかと思っております。いま東町の町内で曲げわっぱ太鼓、東(あずま)太鼓を一生懸命習っている子供たちがいます。この前城西小学校の学芸会に特別出演して大変な反響を呼びました。これはただ太鼓をたたいてよかつたというのではなくて、子供たち

つたという新聞記事もありました。ただ勉強、勉強と追いまわすのではなく、何か協調性をもった子供に育てなければならぬと考えます。それから学校教育の中に、市民から講師を頼んで道徳の時間にいろんな体験を聞かせることもあつてもよいと思います。次に施設開放ということなんですけれども、いま学校の施設は開放されていいますが、これに加えて官公庁の施設も開放して地域の集まりを持てるような機会を提供してほしいと思えます。そういう場で子供から大人まで、いろんなことを考え、話し合うことで地域の盛り上がりにつながり、地元の活性化にもつながっていくんじゃないかと思えます。最後に、私たちは広い視野に立つて、よその町はどうなのか、よその町から大館を見た場合、どういう状態になっているのかというところを逆に考えて見る必要があります。いま行動をおこす時期ではないだらうかと考えています。  
**清水**・もうひとつ、黒田一志さん



黒田さん

にお願いいたします。  
**黒田**・私は連合青年会に所属していますけど、内情は年を追うごとに会員が減少し、いろんな事業をやっても参加する人も減っているわけなんです。青年会の状況は自分も含めて面倒なことには見向きもしないで、ラクなことや楽しんで

いことには参加するという面が多くあります。これからの大館を考え、つくっていくのは私たち青年が主体となっていくかなければいけないと思えます。そこで青年たちが交流と研修のできる宿泊施設を造ってもらいたいということですね。若者が気軽に討論できる場所一つ増やしてもらいたいと思えます。  
**清水**・ありがとうございます。三人の方から提言をいただいたわけですが、人づくりについて渡部先生から順にアドバイスをさせていただきます。

**渡部**・地域振興というものをミクロに見ることも必要ですが、いまは教育文化的土壌の肥育というものを市政の最大の柱にしていた方がいいです。そうしないと知的興奮に満ちた壮大なイナカはできないと思えます。その知的水準を上げるとすれば、具体例を申し上げますと、大館には曲げわっぱなどがあるんだから全県一区にした秋田県立伝統工芸品高校をつくってもいい。それからさつき青少年の施設を造つてくれ

というお話がありました。そんなものはいらぬと思えます。何よりも松の下村塾があるんじゃないですか。この塾を利用して、毎日少年、ご婦人、青年、お年寄りたちが入れかわり立ちかわりして研修会なり、講習会なりが開かれています。状況の継続こそが、大館をどん底から救う一番のパワーになるんじゃないかと思えます。  
**山本**・子供の教育については、いくら家庭で勉強し、学校でやっ

ても一つの限度があります。学校そのもののレベルを全体的に上げ、環境をよくしていくかないと、自分の子供も、よその子供も成長しないと思えます。これを一般社会に入れかえてみますと、これをよくしたいというならばそれににつきこむエネルギーと同じ比重のものを社会のため、人のために尽すという必要があると考えます。ですから五〇〇%の力を自分の子供に尽すならば、あと残りの五〇%は自分の住んでいる社会に尽すという心があって、初めて美しい町ができてくると思うんです。

**三宅**・いま人の足を引っぱる、和がないというようなご提言がありました。秋田県全域、日本列島がこういう性格をもっていると考えます。ただ度合いの問題はあります。ただ度合いの問題はあります。地域のことを考えるためにいろんなプロジェクトを作り、そのリーダー同士が話し合いをするということになれば心の満足もできま

すし、ふれあう機会も多くなるので足引つぱりとか、和を乱すということはなくなってくるんじゃないかと思えます。地域全体の発展にもつながっていくわけですね。  
**市長**・市の社会教育のあり方、中身はどうなっているんだらうかと率直に反省してみました。結果をいいますとカリキュラムは公民館で作る「希望の方は勉強してください」という中身になっていきます。しかしこれを急激に変えるというわけにはいきませんので、学習しようとする内容は、学習しようとする方が決める。そして公民